
『にこにこ宅急便』

梅花空木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『にこにこ宅急便』

【Nコード】

N0526H

【作者名】

梅花空木

【あらすじ】

30代を前に就活を始めた二ートの駆^{かける}。しかし、世間は甘くなく、不採用の手紙ばかり。そんなどん底の彼は思いきった行動に出る。自分には何ができるのか、駆の自分探しが始まります。

「ニートから這い上がれ！」

「……申し訳ないですが、今回はご縁が無かったということ……」
「……つんだよ！不採用なら『お前には必要ない』って一言書きやあいんだよっ！」「嬉々として読み始めた自分がバカみたいだ。

（いや、バカだけど。こんな手紙が3通も一気に入れば、誰だって頭にくるだろ？）

28の俺、津和夫木 駆^{つわぶき}は30代を前にニート卒業を目論んでいた。それなのに、ことごとく試験に落ち、只今職探しの真っ最中。

「なあー母ちゃん、俺って名前の通りなんか『かけて』るのかなあー？」「母親に愚痴る。

「なわけないでしょ！ていうか、名前のせいにしないでよ。あんたの日頃の行いの悪さとやる気の無さが、見透かされてるのよ。」

日頃の行いに関しては閉口するしかないが、やる気なら一応あるつもりだ。一応ね。

「……あつじゃあさ、採用が無理なら起業とかしちやえばいいんじゃないかね？」途端に希望が見えてきた気がする。

「起業なんて、採用されるよりもっと難しいわよ。いい？他人を使うのよ！？」母が呆れと怒りの混じった声で言う。

「まあ最初から人を使おうなんて思ってたないさ。初めは自分で働いて、口コミとかで大きい企業にしていくんだ！」もう未来予想図はばつちりだ。

「で、何するの？」止めるのを諦めた様子の母。

「宅配便。」きつぱりと言う。

「具体的には、ハートを届ける宅配便かな。……んー……」にこにこ宅急便『っていう名前にしよう！』

「……は……！？」母は鯉の様に口をパクパクされているが、言葉にならない。

「だからさ、大切な人・大好きな人に気持ちを届けるお手伝いをす

るわけだ。絶対成功するって！」もう今からでも始めたい気分だ。

「手始めにマークとか決めて、Ｔシャツでも作るかな。」働くことがこんなにもワクワクすることだとは思わなかった。

「キャチコピーも考えるか。…」『愛のキューピッド』：うーん、捻りがな。『縁の下の力持ち』？：なんか嫌だ。：『あなたの幸せお助けマン』なんていいかも！」

「…あんたは、言い出すと聞かないんだから。まあ何でもやれるだけやってみな！一応、応援はするから。」

「ありがと。母ちゃん。」『母は偉大』という言葉を変えて実感する。なんだかんだ言いつつも、認めてくれたのが嬉しかった。

「初日にして今後ないお届けもの！？」

開店までの期間、駆はビラ配りに看板作り、お店の外・内装、バイクの整備…と忙しく働いていた。しかし、その疲れは心地よく、とても充実した日々を送った。

開店当日、駆は2時間前からそわそわと最終チェックを繰り返し、「今日が本当の俺のスタートだ！もうダメニートなんて言わせねえぜ！」不安ももちろんあるが、顔のニヤけが止められないのも、また事実だった。

そして開店時間の10:00。駆の心拍数が最高潮になった。しかし、まだ客足の気配は微塵もない。少し拍子抜けしたことは否めないが、ここ何日かで忍耐力も付いたので、取り敢えずまだまだこれからと自らに言い聞かせる。そう、まだ始まったばかりなのだから焦る必要はない。

お昼近くになった。流石の駆も考えが甘かったかと焦り出す。このまままたニート生活かと溜め息を溢した。ちょうどその時、カタッと扉の辺りで音がした。

駆は、バツと立ち上がり、扉を開く。すると、外には誰もいない。

気のせいかな…と思い閉めようとする、下の方から、

「…あつあの…っ。」というか細い声が聞こえた。下を見ると5歳くらいの男の子が立っていた。

「どうしたの？…ママのお使いかな？」小さくたつて大事なお客さん第1号だ。駆は怖がらせないように、やさしく話しかける。

「…えっと…たつきゅうびんやさんってなんでもはこんでくれるんですか？」

おずおずと話す男の子。宅急便屋さんと呼ばれて改めて喜びが込み上げる。

「うん！俺ができる限りのことはするつもりだ！」満面の笑みをむけると、男の子がキラキラと目を輝かせて、

「じゃあ…ぼくをはこんでください！」とハキハキ言う。

「…ちよつ…ちよつと待って！それは話をくわしく聞いてもいい？」
下手をしたら誘拐になってしまう。ここは慎重に行くべきところだ。
「ボクのパパ…ひとりでおおさかつてとこでおしごとしてるんです。
ボク…パパにあいたくて…。ママにつれて行ってほしいけど、ママ
もおしごとしてるので…。」とうつ向く。この子なりに気を遣って
いるらしい。駆は心からこの子の役に立ちたいと思った。

「よっし！じゃあ大阪まで連れて行ってやるよ。でも、お母さんに
連絡してからだぞ。」

「あつ…おかねは…っ！」とぱつと顔を上げ言いかけたところで、
「いいって、いいって。金は取らねえよ！それより大阪までバイク
だが…大丈夫か？」お金より、この子がバイクの長旅に耐えられる
か駆は心配だった。

「へいきです！よろしくおねがいます！」ぺこんと頭を下げる。

「そうだ。名前聞いていいか？俺は駆。かけにいつでも呼んでくれ。
それと敬語止める。子供は子供らしくが1番だからな！」にかつと
笑ってやると、

「うん！！ボクは太守^{たす}だよ。」と満面の笑顔で返ってきた。

「なんか…変わった名前だな。でも×と+で相性はいいかもな！じ
やあ狭い店^{とこ}だが、用意する間上がって少し待っててくれ。駆はそそ
くさと準備に取り掛かった。正に自分がしたかったのはこういう仕
事だったのだと改めて感じた。

キミが教えてくれたこと

バイクの調子を改めて確認し、はした金を持って、さあ出発と意気込んでいる駆とは反対に、太守は少し落ち込んでいた。どうやら母親に電話で叱られたらしい。

「母ちゃんに怒られたんだろ？行くのやめるか？」一応太守の気持ちを確かめる。しかし、父親の元に行きたいという気持ちまでは曲げられなかった様で、

「おっ…おこられたってへいきだもん！」と明らかに痩せ我慢している返事が返ってきた。

「じゃあ俺も連帯責任だな。」

「れ…？」太守が目をパチクリさせる。

「つまり一緒に怒られてやるってこと！」にっと笑って、太守の頭にぽんっと手を置くと、

「かけにい、ありがと！」と太守の顔が綻ぶ。

バイクが風を切って走る。風の心地良さと、風景がどんどん移り変わっていく様子に太守は心弾ませている様だ。その様子を駆は微笑ましく見守る。弟がいたらこんな感じなのかなと、少しくすぐったい気持ちになった。

太守の体調も考え、高速ではサービエリアにこまめに寄り、休憩をとった。たくさんの方が行き交う様子を物珍しそうにキョロキョロと見渡す太守の様子が実に可愛らしく、思わず笑ってしまう。

「クス…なんだ、太守はこういふとこ初めてか？」

「こんなにひとがいるとこなんてはじめて！それにおみせもいっぱいあるね！」太守が頬を高潮させて言う。

「腹…減ったろ？好きなもん買ってやるから、何でも言えよ？」そう言ったにも関わらず、太守が選んだのは、安いソフトクリームだ

った。遠慮するなと言ってもするから仕方なく、うどんを買って半分ずつ食べた。

大阪に到着すると、直ぐ様太守の持っていた父親の住む住所のメモに向かう。日曜の今日は父親は仕事は休みらしい。

「父ちゃんと会ったら、何がしたい？」と、エレベーターで父親の部屋に向かう途中、ニヤニヤしながら駆が問いかけると、

「うーんと…えっと…ママもボクもげんきだよっていいたい！」と大真面目な顔で太守が答える。その時駆は、太守が決して遠慮深い訳ではなく、元から欲がないことに気づいた。

インターホンを押すと、穏やかな男性の声が聞こえた。その声に、
「パパ！？ボクだよ、太守だよ！」と興奮を抑えられないという様子で太守が答える。やがて早足で扉に近づいてくる音が聞こえ、

「太守！？来てくれたのか？」という声と同時に扉が開き、中から出てきた父親が太守を抱き上げる。

「パパ！あのね、かけにいつていうたつきゅうびんやさんが、ボクをここまでおくってくれたの！」につこりと太守が言う。

「宅急便屋さん…？」

「あのっ初めまして。私は、幸せ宅急便というものをやってる津和^{つわ}夫木^{ぶき}と申します。」駆は深々と頭を下げる。

「この子を私のところへ送る…つまりは幸せを運んでいただいたんですね。どうもうちの子がご迷惑をおかけして…。しかし、私もなかなか会いに行けないので、とても嬉しいです。有り難うございました。」にこやかに父親が言う。

「迷惑なんてことありません。良いお子さんですよ。バイクでここまで来たのですが、無理をさせていなければいいですが。それに私が少しでも役に立てたなら幸い…ですっ。」怒られることを覚悟してきたのに、逆に礼を言われて胸が熱くなり、涙が溢れた。

帰り際、部屋に入っていた太守が少し照れた様子で出てきた。

「…かけにい…ありがとう。これあげるっ！」そう言って駆の似顔絵をくれた。にこ宅Ｔシャツを着て、バイクに乗ってる絵だ。

「ありがとな、太守。お前は偉いけど、もう少しわがままになってもいいと思うぜ？コレやるよ！」駆が地元商店街の福引きで当てた遊園地１日無料券を太守に手渡す。

（一緒に行く相手もいなくて、忘れかけてたけど、結果役に立って良かった。）

「わあ！！本当にもらっていいの！？」はしゃぐ太守。

「おう。父ちゃんと滅多に会えない分、たくさん思い出作ってこいよ！」

「また…あえる？」少し寂しそうに太守が訊ねる。

「おう！またいくらでもバイク乗せてやるよ。行きたいところ考えとけな！」満面の笑みで返す。

帰り道は行きとは違い、なんとなく切ない様な変な気分だった。太守と父親が再会した時は、確かに嬉しかったが、やはり短い間でも弟のように思っていた太守と一緒に乗っていないバイクは、いくら風を切って走っても、物足りない気がした。しかし、お客様を幸せにするのが自分の目的であって、自己満足する為にやっているのではないと思い直し、星空の下家路へと着いた。

く花の記憶：すみれく

どこかの国では、睡眠は死ぬことで、目覚めることは、生まれ変わることだと信じられているそうだ。彼女は正にそんな感じだった。

店がOPENして、早3ヶ月。最近は店の切り盛りにも慣れた。相変わらず、収入の変動はあるが、それでもなんとか暮らしていける程度の範囲内だった。しかし、仕事内容は、引越しの荷物の運搬の手伝い、米・野菜などの仕送り等、普通の宅急便の仕事と変わらず、駆の思い描く様な仕事は、なかなか来なかった。

「仕事つてのは、好きなことだけできるわけじゃないのよ。ほとんどがやりたくないものの方が多いんだから！」と母の小言を思い出す。その時はわかった気でいたが、改めて痛感する。

「こんにちは……」扉が開き、駆と同世代くらいの女性が入ってきた。

「……っあ、ハイ！いらつしやいませ！」急いで営業モードに入る。

その女性はメモの様なものに目を通し、

「お仕事をお願いしたいんですけど……いいですか……？」少しこくびをかしげ、戸惑った様な顔で言う。

「はい。何でも仰ってください！……っあれ？清水さん……！？」可愛いらしい少女から少し大人びた印象にはなっているが、やはり可憐な雰囲気が変わっていない。加えて自分の初恋の相手なのだから間違えるはずもない。嬉しいやら恥ずかしいやらなんだかテンションが上がる。

「……？……あの、どちら様ですか？私たち会ったことありましたっけ……？」澄んだ大きな瞳で駆を見つめてくるが、覚えてないらしい。ひとり舞い上がっていた駆はガツカリする。

清水かすみは小学4年の時の駆の同級生だ。見た目はもちろん、頭

も良く、男子の憧れの的だったが、事故で両親を亡くしてから、遠くへ引越してしまったのだ。

（クラスメイトなのに覚えてないって俺って影薄いのか…。まあどうせ眼中になんか入ってなかったんだよな。）そう思い、

「あー…の、一応俺小学4年の時のクラスメイトだった津和夫木駆でも話したこと無かつたし、覚えてなくて当然だよな。」渴いた自嘲の笑みを浮かべる。

「そうだったんですか！？すみません、失礼なこと言ってしまっただけです。」すみれがうつ向く。

「あつ氣にしないから大丈夫だつて！それより仕事内容の方聞いてもいいか？」なんだかすみれの様子を見ていたこちらが悪い氣がしてきて慌てる。

「仕事の内容をお話する前に、理解しておいてほしいことがあります。」表情を少し硬くし、すみれが言う。

「理解…？」なんのことだかさっぱりわからず返すと、こくりとすみれがうなづく。そして先ほどのメモに少し目を落とし、

「小4の時のクラスメイトの津和夫木さんなら知っているかもしれませんが、私は事故で両親を亡くしました。そして、その時の怪我で、私自身も記憶障害になってしまったのです。」他人事の様にするみれが話す。

「…！？ちよつ…ちよつと待つて。記憶障害つて…？」事故にすみれ自身も事故に巻き込まれたのは知っていたが、その後遺症が残ったなんて初耳だ。

「具体的に言うとな…昨日の記憶が私にはすごくおぼろ気で、一昨日より以前の記憶は白紙も同然。だから、あたなのことを覚えてなかったのも、その障害のせいだと思います。今日改めてあなたのことを覚えたとしても、明日にはまたぼんやりとした記憶になってしまふんです。」すみれの顔が悲し気に歪む。

「…っ…！…で、でもそしたら、何回でも何十回でも自己紹介する

よ！忘れたら、また覚えればいいだけの話じゃん！」正直衝撃は受けたが、何よりすみれの悲しむ顔は見たくなかった。

「嫌…じゃ…ないんですか？私のまわりの子は、私から離れていったのに。」すみれが不思議そうに聞いてくる。

「全然！じゃあ俺が新しく友達第1号だ！」にっと笑う。

「…クス…津和夫木さんて…変なひと…。」少し呆氣にとられた後、すみれが笑う。

「ハハッそうそうその笑顔！やっぱり清水さんは笑顔が似合うよ！」照れながら本心を言う。

「それと！元クラスメイトなんだから、敬語とさん付けは禁止な。駆で良いって。」ちよつと真面目な顔をして言う。

「じゃあ…そうする…ね。私のこともすみれでいいよ？」少しはにかんで、すみれが言う。

「よつ…よろしく…な、す…みれ…。」なんだか恋人同士みたいだと感慨に耽^{ふけ}っていた駆は、

「…で、お願いしたいのはね…。」というすみれの声で我に返った。「っああ！…うん。ごめん、ごめん。」仕事中に何を考えているんだと心の中で自分に喝をいれる。

「…私の…過去を探して…。」

「…過去？」

「両親を亡くして…自分も障害を負って、いろんな県に住む親戚にタライ回しにされていたから、その時の…。私が確かに生きてきた証を見つけてほしいの！」

「…す…みれ…の生きてきた足跡を辿るみたいな感じでいいのか？そうすれば、少しでも記憶に残っている風景とかあるかもしれないな。」まだ呼び捨てに慣れない。

「うん、一緒に来てくれると嬉しい。1人旅は不安で…。でもこういうのは…畑違いかな…？」さらさらのストレートの黒髪を耳にかけながらすみれが言う。

「いつ…や、そんなこと…ないよ。俺にも手伝わせて…！」駆は鼓

動が速くなるのを感じた。

く花の記憶：咲いた、咲いたく

簡単にO・Kしてしまったものの…記憶が探せる確証はない…駆は悩んでいた。しかし、彼女をこのままにしておくこともできない…自分のできることなら、なんとかして力になりたい。

翌朝、駆は早く起きて旅支度を済ませ、すみれを迎えに行った。彼女の「あの」話が本当なら駆に依頼したことを忘れている可能性もあるからだ。少しドキドキしながらインターホンを押す。

「…はい。どちら様ですか？」

「えっと…すみれ？迎えにきたんだけど、もう出かけられる？」ドアが開き、すみれが顔を出す。

すみれは、ドアの外にいた男に見覚えはある気がするが、よく思い出せなかった。

「…あなたは？」そう訊ねると、その男は哀しそうに笑って去っていった。

「誰だったんだろう…？」いくら考えても昨日何をしたのかが、曖昧な状態のすみれにはわかるはずもない。しかし、どうしても思い出したかった。哀しそうに笑った面影が夢に出てきた男の子に似ていたからだ。

『…ちゃん、すみれちゃん。これあげるね！』そう言って「すみれ」の花を持ってきてくれた男の子。しかし、記憶が無くて誰かと訊ねると、泣きそうな顔で笑った男の子…。

（あの男の人は、夢に出てきた男の子…？）

「…っ！」玄関を飛び出す。

（さっきのことを謝って、あの夢は過去の記憶なのかを聞きたい。もし本当にそうならあの時言えなかったありがとと、ごめんなさいを言わなきゃ！）

どこにあの人が向かったのか分からないまま闇雲に走った。そして交差点のところで何かにぶつかった。

「つきや…！」倒れそうになるのを長い腕が支えてくれた。

「っと！すみません！…あれっすみれ？そんなに急いでどうしたんだ？」少し戸惑った様子で駆が言う。

「さつきはごめんなさい。あなたは…私のこと知ってるんですか？それなら、あなたのことも教えてください！」勇気を振り絞って言う。

「…そういう約束だったもんな。さつきコンビニでコレ買って来たんだよ！」と、にかつと笑い、服に貼り付けたガムテープを指す。太いマジックで「駆」と書いてある。

「改めて、先ほどは失礼なことを言ってしまい、ごめんなさい。私があなたに仕事を頼んでたんですね。そう言われてみれば、昨日出かけた記憶はなんとなく覚えてます。」

「いや、こっちこそごめん。俺も態度が悪かったな。ちょっと凹んじゃまってさ。」苦笑いで駆が言う。

「あの…もうひとつ聞いていいですか？」

「ん？」

「小学生ぐらいの頃に女の子に「すみれ」の花をあげたことありませんか？」

「…え？」

「私…男の子から「すみれ」の花をもらった夢を見ました。その男の子とあなたが似ていたもので、もしかして…小学生の頃会ったのかなって…。」

「そういえば、1回母ちゃんの大事に育てていた「すみれ」の花を摘んで、ゲンコくらったことがあるな。確か誰かにあげようとしてた気がする…。じゃあその相手がすみれだったのかもな。」本当は4年の時、担任にすみれが事故で入院したことを聞き、心配でたま

らなくなりお見舞いに行つたのだが、照れ臭いので、すみれには秘密にする。

「あとひとつコンビ二でいいもの買ってきたんだ。すみれにはこれが必要かなって…。」スケッチブックをすみれに差し出す。

「スケッチブック…？」困惑した顔ですみれが受け取る。

「うん。コレに今日の気持ちとか、何したかとか書けばいいんじゃないかと思って。そうすればさ、読み返せば、今日のこと思い出せるだろ？…どう？」すみれの顔を窺う。

「そうですね、そうすればいいかもしれません。」かすみがつなずく。

「そうそう、それ開いてみ。こんな顔の奴見たら俺だから…。」咳払いをし、少し威張った調子で駆が言う。

そこには人…らしきものが描かれていた。どうやら自画像らしい。

「これ…駆さん…？」笑うのを堪えてすみれが聞く。

「おう！上手く描けてるだろ？」鼻高々に言う駆。

「クス…これはある意味才能かもしれませんね！」すみれが笑う。

「あんまり褒めてねえだろ、それ…。まっいいや！」駆は、わざとすねた様な顔をして見せた後、にっと笑う。

咲いた。

咲いた。

キミが咲いた。

く花の記憶：言の葉く

朝日の中を駆はバイクで走っていた。朝日に照らされ、眩しく輝く道端の草木もすみれの記憶が見つかることを願って、応援してくれている様な気がする。

すみれはアパートと前で待っていた。すみれが駆に気づき、手を振っている。バイクでの移動となるので、昨日事前に服装のアドバイスをしておいたのだが、やはりどんなラフな格好もすみれに似合っていた。

「おはよう！お世話になります。」すみれが丁寧に頭を下げる。

「……。」

（そういえば、私服とかちゃんと見るの初めてだよ……。）昨日と一昨日はそんな余裕は無かったのだ。すみれに見とれていると、

「……駆くん？どうかした？」

少し困った笑顔ですみれが聞いてきた。

「……え？あ、ごめん。はよっ！」慌てて挨拶をするが、顔が火照っているのが自分でもわかる。

「じゃ、じゃあ出発するか！」すみれにヘルメットを手渡す。

「うん！」すみれの顔は希望に満ちていた。

駆たちの住む町から少し離れた喜多郷村きたさとに着いた。のどかといえば

聞こえはいいが、閑散としているという方がしっくりくるそんな雰囲気きんきの村だ。ふたりはバイクを降りた。

「すみれが持っていたメモによると、このへんなんだけど、なんか見覚えあつたりする？」と言つても田園風景なんてどこも変わらないうし、わかんないか？」すみれが傷つかない様に言葉を選びながら、彼女の様子を窺う。

「……うーん……。」キョロキョロと辺りを見渡すすみれの瞳が頼り無

げに揺れる。

「あ、じゃあさ。少し歩いてみよう。バイクで走っただけじゃ気づかないことってあるかもだし！」バイクを押しながら歩き出す。

「……。」朝は明るい表情をしていたすみれだが、記憶探しの難しさを思い知ったのか、とぼとぼと下を向いて歩く。

そんなすみれに歩幅と歩調を合わせながら、

「あんまり思い詰めないで？『今』のすみれが在るんだから、当然『過去』も絶対在るんだ。」にこりと笑う。

「そう…なのかな。でも、思い出せないなら、ないのと一緒にじゃ…。」すみれの声が掠れる。

「違うよ！小学生の頃に俺らが会ったことを夢に見たって言ってたじゃん？そんな風にちよつとしたきっかけで思い出せるんだよ！全くないのとは全然違うさ。」すみれを安心させる様に優しく言葉を紡ぐ。

「それに…。」と駆が続ける。

「？」

「すみれはさ、今までたくさん失ってきたでしょう？だからこそ、過去の記憶を取り戻して、今度こそ幸せになつてほしい。」事故直後、病院で見たすみれは、まるで空っぽだった。人間は、受けたショックがあまりに大きいと、自分自身を守る為心にブレーキをかけるらしい。目が虚ろで、何を話しかけても表情も変えない、あんなすみれはもう見たくなかった。

「…なんでそんなに私のことに真剣になつてくれるの？」少し伏せ目がちにすみれが聞いてきた。

「それはっ…。」すみれが初恋の相手で、心配してお見舞いも何度も行つたなんて言えない。もしかしたら、気持ち悪がられるかもしれない。

「や、やっぱさ、心配だろ？元クラスメイトなんだし！」

（これなら妥当な理由だろう。）無理矢理笑顔を作る。

「そう…。ありがと。」少し淋しげにすみれが笑う。

少しの間無言で並んで歩いた。大きな夕日がふたりを照らしている。
「あつ！」小さな声をすみれがあげた。

「！？…何か思い出した？」直ぐ様駆が聞く。

「あ…、ごめんなさい。猫がいたの。」すみれが指を差した先に、猫がいた。トラ猫だ。猫はすみれが近づくとゴロンと横になり、お腹を見せた。すみれが優しく撫でる。

「…猫、好きなの？」記憶ではなくて少し残念だったが、あんまり焦っても仕方ないし、何よりすみれが楽しそうなのでまあいいやと思ひ、すみれの隣にしゃがむ。

「うん！多分昔飼ってた猫なんだけど、『まぐろ』っていう猫が写った写真があつたの！」少女の様な笑顔ですみれが話す。

「…まぐろ？なに…そのネーミングセンス…ぶはっ。」笑いを堪えていたが、思わず吹き出す。

「な、なに！？笑わなくなつて…。かわいいでしょ？」すみれは恥ずかしいのか、顔を真っ赤にしている。

「かわいいかあ、ソレ？…そういえば、俺も猫飼ったことあるな。

一時期だけ。」夕日を眩しそうに見つめて言う。

「へえ。どんな猫？なんていう名前なの？」すみれは興味津々の様子だ。

「もともと野良で、ボス猫だったらしくて、気高い猫だった。自由に生きて自由に死んだ。名前はそのまま『野良坊』とか呼んでた。」何物縛られず、自分の行きたい様に生きる。その生き様が駆にはとても新鮮で眩しく思えた。

「『野良坊くん』？じゃあその子にぴつたりの名前だったんだ。」目を輝かせるすみれ。

「…笑わないの？」自分の様にすみれが笑うと思っていた。

「なんで？いい名前じゃない。」いい名前だとは思っていなかったが、すみれに言われるとそう思えてくるから不思議だ。

気づくと、辺りは薄暗くなっていて、猫もいつの間にかどこかへ行ったらしかった。

「疲れただろ？そろそろ帰ろう。大丈夫。きっと見つかるよ！この村には無かったただけだ。」バイクのところへ戻りながら言う。

「うん、ありがと。もう少し頑張ってみる！」少しだけ元氣を取り戻したすみれが言う。ふた리를乗せて、バイクが走り出す。

「もし…。見つからなかったとしてもすみれは俺が守ると言いかけて、止める。」

（『もしも』の話なんか今は必要ない。それにそんなのすみれは望まないかもしれない。）

「ん？何か言った？」

「…なんも？」

ふたりの頭上には1番星が輝いていた。

く花の記憶：『さみしい』く

「駆くん…好き…。」緊張に声を震わせながら、すみれが言う。

「ええええええええっ！？…ってアレ？」ベットのうえで飛び起きる。心臓が暴れ、全身が汗だくだ。

「夢オチとか…マジだせえ。そんなことあるわけないし。第一すみれは今そんな場合じゃ…。」ぶつぶつと独り言を言い、軽く自己嫌悪に陥る。

今日は山梨県まで行くことになった。富士河口湖町とメモには書かれている。

「…かわぐちこまち？湖の近くなのかな？」と、高速のインターで休憩をとっている時にすみれが首をかしげる。

「う、うん。…湖の近く…。」変な夢を見た手前、普通に話しているだけなのに気まずい。

「へえ、行ったことあるの？」感心したようにすみれが言う。

「バイクを買ってすぐの頃ツーリングに行ったんだ。…すごく大きな湖で、近くに富士山も見えた。今日も天気良いし、きつと富士山が綺麗に見えるよ。すみれにも早く見せたいな。」なんとか落ち着いてきてぎこちない笑顔で返す。

河口湖の近くに近づくと、すみれに話した通り、壮大な富士山が見えてきた。湖面も太陽の光を浴びてキラキラと輝いている。湖畔の近くでバイクを降り、遊歩道まで行く。

「綺麗…。」すみれは余程感動したのか、ぽつりと呟いたまま立ち尽くしている。

「自然てさ、本当にすごいよな。こういう景色見ると心からそう思う。」駆は以前と変わらない素晴らしい眺めに安堵と畏怖の混ぜ合わさった様な感情を抱く。

「うん…本当に。」返事はしたが、まだすみれは湖の方を眺めている。

「気に入った？」すみれの顔を覗き込む。

「うん！あ…でもあるけど…私明日にはこの景色覚えてないかもしれないから。無駄かもしれないけど、しっかり見ておきたいなって…。」苦笑いのすみれ。

「……。」すみれには笑っていてほしいとは思っていたが、無理をして笑っている姿に心が痛む。フォローの言葉も見つからなくて、途方に暮れる。

「ここだ。」

メモに記してある住所に到着した。そこには年期の感じられる古びたアパートがあった。大家さんらしき人が玄関前の草むしりをしている。

「あの人に聞いてみよう。…すみれ？」先ほどから黙ったままのすみれの様子が気になった。

「…っ…こ、怖…い…。本当にあるの…かな…。」すみれの顔は青ざめ、肩が小刻みに震えている。

「大丈夫。きつとある。俺を信じて？」立っているのがやつとの状態のすみれの肩に両手を置き、安心させるように笑う。

「俺が行って聞いてくるよ！だからすみれは…。」言い終わる前に、「ま、待って！大丈夫だからっ…一緒に行く。これは私の問題だから私が行かないと意味ないっ。」と言うすみれに、腕にすがりつかれ、内心驚いたが、なんとなく安心もした。

「ああ…澄川さんすみかわとこの親戚のお嬢ちゃんかい？美人さんになったねえ…わからなかったよ。」昔を懐かしむように大家が言う。

60代くらいの女性の大家はどうやらすみれがここに住んでいたころからここアパートの管理人をやっていたらしい。

『あの…何かその頃のもので残っている物とかありませんか？』駆

とすみれが同時に同じことを聞き、顔を見合わせて、お互い照れ笑いをする。

「仲が良いねえ。うーん…そうだねえ…とりあえず中に入ってお茶でも一杯飲んでつとくれね…何かあったと思うから。」にこにこと大家がふたりを家に招き入れる。

アパートの中は外見と変わらず古かったが、手入れは行き届いている様に見える。

「…オンボロで驚いたろう？でも何年も大家やってると、こんなアパートでも愛着が湧くんだね。おかしいだろ？」お茶を駆とすみれの前に置き、大家が愛しそうに部屋を見渡す。

「おかしくなんかないです。とても大切にしてくるのが伝わってきます。」本心だった。

「思い出がこのアパートにたくさん詰まっているんですね。」大家と同じ様に部屋を見渡すが、すみれの目は、迷子の子供の様だ。

「そうだ…年寄りのつまらない話に付き合わせて申し訳なかった。

…今探してくるから、くつろいでいておくれ。」ふたりを残して大家が席を立つ。

30分ほどが過ぎ、大家が戻ってきた。何やらノートの様なものを持っている。

「これだよ。澄川さんが引越しの時、部屋に落ちてたノート。お嬢ちゃんが書いてたみたいだね。引越し先に連絡したけど、預かってた女の子はもう違う家に預けたからそのノートももう必要ないって言われちゃって…。冷たいねえ。」ふうと溜め息をつく大家。

「でも…とっておいてくれたんですね！？」すみれの顔が見る見る明るくなる。

「当然だよ！お嬢ちゃんがいつも大切そうに抱えていたからね。」そう言いながら大家が微笑む。

中を開いてみると、ちょうど退院直後から半年分の1日1日の記録がすみれの字で丁寧に書かれていた。退院当日の日、つまりそのノ

「トの書き始めの日は『さみしい』その一言だった。彼女が一瞬にして無くしたもの、取り戻せなくなったもののことが、この一言に集約されている気がして、やりきれない。

「……。」「黙ってしまったすみれ。

「すみれ？」

（いくら過去が知りたいって思っても、知ったら逆に知らないままの方が良かったって思うものもあるのかも……。）

「う…嬉しい…。私にも…ちゃんと…か、過去が…。」「すみれは悲しかったのではなく、嬉しかったのだ。泣いていて、言葉が続かない。

例えばどんな過去であろうと、それはその人が確かに在った証拠。それはきつと私たちが気づかないだけで、とて愛しいものなのだ。

来た時に寄った湖畔に戻ってきた。

「あ、えっと…さっきはいきなり泣いちゃってごめんね。びっくりしたよね。」「まだ少し涙目のすみれ。

「ううん。よかったよな、見つかった！なんか俺も嬉しかった！」

（記憶の有り難さが、改めてわかったから。）

く花の記憶：決心とつぼみ

「それはそうと！腹減ってない？お祝いになんかおごるよ！ちょうどこの辺にオススメのほうとうの店が…」と歩き出そうとして、
「ほうとうもいいけど…お弁当作ってきたから、よかったら食べてもらっていい…かな？」すみれが恥ずかしそうにリュックからお弁当箱を出す。中身は、たこさんウイナーに、厚焼きたまご、りんごのうさぎ…など見るだけでも楽しいお弁当だ。

「駆くんの好きなもの聞いておけば良かったんだけど…タイミング逃しちゃったから、なるべく一般的なのにしてみたんだけど…」余程恥ずかしいのか、小声になるすみれ。

「え、俺？俺、何でも好きだよ！敢えていうなら卵かなあ。結構簡単に料理できるし、色々使えるし、安いし。何より、美味しい！」二カつと笑う。

「くすつ…主婦みたい。そっかあ、良かった。じゃあコレも好きかな？」すみれが楕円形^{だえんけい}の揚げ物を指さす。

「ん？これ…何？」こんなの初めて見た。

「食べれば、わかるよ！」すみれがにこにここと笑う。

「…あ、目玉焼きとハム？！…美味しい。」揚げた目玉焼きなんて驚きだが、それよりもその味に驚く。

「気に入った？スコッチエッグって言うんだよ。私が高校生の頃引き取って面倒見てくれた叔母さんがよく作ってくれたのって…言ってもそうメモに残ってるだけなんだけどね。でも、とても可愛がってもらったことだけはぼんやりと覚えている気がする。」すみれが遠い目をする。

「その叔母さんは今は…？」なんとなく予測できたが、ちゃんと聞いておきたかった。

「…亡くなった。今では顔も写真見ないと思い出せないけど、もっと一緒にいたかった。」すみれが泣きそうな顔で笑う。

「そっか、大切な人だったんだね。」

（俺がすみれの支えになればいいのに…。）

「全部美味かったよ！ごちそうさん！すみれ料理上手いな。」お世辞ではなく、本当にすみれの手料理は美味しかった。

「そ、そお？」すみれが顔を真っ赤にする。

「うん！あつ…そうだ！お礼に今度うち来いよ。うちの母ちゃんの料理も結構美味いからさ。それにひとりで食べるより、絶対楽しいから！」ひとりでの食卓は父が早くに死んだ駆も嫌というほど経験したのだ。

「じゃあ…、今度行くね！」すみれは満面の笑顔で笑った。

約束の日の当日。約束の時間は18：00だが、駆は朝からそわそわと落ち着かず、掃除を入念に行っていた。

「友達が来るだけでしょ！何をそんなに張り切ってるの？…まさか…好きな子？」母には友達が来るからとしか伝えていないのだ。

「た、確かに女の子だけどっ！そんなじゃねえよっ！」顔が赤くなっているのが自分でも分かったので、母とは顔を合わせない。

「ふーん？ま、そういうことにしといてあげる。」疑っている様子の母。

17：45分。駆はすみれを迎えに行くため家を出て、途中の道ですみれに鉢合わせた。

「あ、すみれ！迎えに行くって言ったのに…。」てつきり家で待っているものだと思っていた。

「夕御飯ご馳走になるのに、迎えまでしてもらうなんて悪いもん。」すみれが微笑む。最近のすみれは以前より明るくなり、よく笑う様になった。記憶を見つけたことが、彼女に良い変化をもたらしているらしい。

「ただいま。ほら、すみれも入って？」 駆が玄関に先に入り、すみれを呼ぶ。

「…お邪魔します。」 少し緊張している様子のすみれ。

「いらつしゃーい！ あらあ美人さんねえ。愚息なんかには、勿体無いわあー。」 普段駆と話す時とは、2トーンくらいは軽く違う声を出しながら、母が出迎える。ちゃっかり服まで着替えている。

「だ、だからそんなんじゃないって言っただろ！？ それと普通にしてってくれっ！」「焦る駆。こんな母をすみれがどう思うか不安だった。」「駆ったらあ、こおんない子がいるならもっと早く紹介してくれても良かったのに…。」 母はカマトトぶっている。

「母ちゃん！ もついい加減にしてくれよ！！」 母の振る舞いが恥ずかしくて、怒鳴ると、

「まったく、煩いわね。わかったよ、普通にすればいいんでしょ！ いらつしゃい、どうぞ上がって？」 と母はあっさりと普段の話し方に戻る。

「…… 始めからそれでいんだよ。」 むすつとして言う。

「…クスッ…。仲がよろしいんですね。私清水すみれと申します。駆くんにはいつもお世話になっています。」 やりとりを見ていたすみれが笑い、丁寧にあいさつをする。

「さあ、沢山食べてってね！」 駆の母は、ひじきごはん、肉じゃがや、茶碗蒸し、ほうれん草とシラス干しのソテー、玉ねぎを溶き卵でとじた味噌汁などを手際よくテーブルに並べる。

「はい、ありがとうございます！ いただきます。」 にっこり笑ってすみれが返す。

「ねえねえ早速だけどさあゝふたりの出逢いとか聞かせてくれる？」 駆の母が食後にお茶を出しながら聞く。どうやら冷やかしたいらしい。

「あ、えっと… 私実は小学4年生の時の駆くんのクラスメイトで…。」

今回お仕事を駆くんをお願いしたんです。」すみれが真面目に答える。

「ええ？それだけ！？」あからさまにガツカリする母。

「……あの……すみません？」なんのことだか、さっぱりわからないすみれが謝る。

「だから言つたろ？そんなんじゃないって……。」改めて口にして凹む。

（俺たちはなんの関係もないんだ……。）

すみれを送る帰り道。

「ごめんなあー騒がしい母ちゃんで。いつもあんなノリだからさ、びつくりしたろ？」すみれと並んで歩きながら言う。

「ううん！あ、まあ少し驚いたけど……すごく楽しい人だね。」すみれがいたずらっぽく笑う。

（あ、なんか今なら言えそうかも。）足を止める。

「駆くん？どうかした……？」すみれが振り返る。

「俺さ……すみれのこと……その、好き……なんだ……。」数日前まで言えなかった言葉が、途切れ途切れだが、なんとか言えた。

「嬉しい！私も駆のこと大好き！」照れもせず、はつきりと言うすみれ。

（ん？なんか……？）好きとは言われたもののなんだか、違和感がある。夢のように、すみれが恥ずかしそうにするのを想像していた。

「そっか。ちなみに……うちの母ちゃんは……？」まさか……という思いがよぎる。

「ん？駆くんのお母さんも大好きだよ？面白いもん。」そう言い、駆と母のやりとりを思い出したのか、すみれが楽しげに笑う。

（「も」って同列……！！……）なんというか、一気に気が抜けてしまった。

く花の記憶：花守人（ハナモリヒト）く

「あんた、バカ？」母がスッパリ言い、白々とした視線を向けてくる。

帰宅した駆の様子を見た母に問いただされ、すみれに告白したことを打ち明けたのだ。

「うつ…だ、だってさ…。」反論しよにも、返す言葉がない。

「なに？今まで彼氏気取りだったとか？やっただあゝ勘違い男ってサイテー。キモーイ。」完全に母にバカにされている。

しかし、少し…ほんの少しだけ期待していた駆はぐうの音も出ず、うつ向く。

「大体ねえ、考えてもみなさいよ！あの子、事故に遭って記憶障害になっっちゃったんでしょ？人付き合いかもあんまりできなかっただろうつし、恋愛感情知らなくてもおかしくないわよ。…それか…。」
「自覚してないだけじゃない？と言おうとして止める。母から見てもすみれは駆を恋愛対象として見ているように思えた。しかし、ここから先は、ふたりの問題だと考えたのだ。」

「そっかあ！母ちゃん頭いいな！」がばつと顔を上げる駆。

（そうだよな、まだフラレたわけじゃないだもんな！）なんだか元気が出てきた。

次の日。今日もすみれの記憶を探す約束をしている。駆は今までより入念に服を選び、何回も鏡の前でポーズをとる。

「女の子じゃあるまいし…気色悪い…。」開いたままになっていたドアから母が駆の部屋を覗きこんできて顔をしかめる。

「か、母ちゃん！？いいだろ、別に。…てか、勝手に覗くなよ！」

「そんなこといいから、時間はいいの？もう9時だけど？」さらつと流し、あっさり言う母。

「ええ！？ヤツべつ、行ってくる！！」ドタドタと階段を降り、玄関を出る。

バイクの置いてある車庫の前に慌てて行くと、すみれが立っていた。「おはよう！昨日は大丈夫だった？なんだか帰り調子悪そうだったけど…。」すみれが駆の顔を窺う様にじっと見つめてくる。

「だっ…大丈夫！！」すみれの視線に耐えられず、声の上擦る。しかも、違う風に解釈されたとはいえ、昨日告白したばかりで、余計緊張する。

「なんか…顔、赤いよ？」心配そうに顔を近づけてくるすみれ。
(良い匂い…。…って、何変なこと考えてんの！？俺！！)

「ほ、本当に大丈夫！なんか暑くてさ…あははっ。」大袈裟に笑って言う、すみれも安心した様だ。

その日行ったのは、横浜市の繁華街の近くだった。休日のせいか、通りには人に溢れ、賑わっている。

「…っ…すごい人だなあ…。すみれはぐれないように…。」ついてきてと言おうとして、横を見たがすみれがいない。

「すみれ！すみれ、どこ！？」まさか本当にはぐれるとは思わなかった。必死に呼びかけっていると、

「…っ…つか…ける…君！」駆の少し後方からすみれの声がした。道行く人を押し退け、すみれが伸ばした手をがちり掴む。

「っはあゝ…。見つかった良かったあゝ。」心から安堵した。

「ご、ごめんね。離れちゃって…。なんかいるんな人に押されてどんどん遠くに…。」謝るすみれ。

「ん？まあいいさ！ちゃんとまた会えたしっ。」ニカツと笑う。

「…それで、あの…。」ごによごによとすみれが言う。

「ん？」

「コレ…。」言いながらすみれが、目線を下ろす。すみれの目線を追っていくと、駆がしっかり掴んだままのすみれの手があった。

「う、わっ！ごめっ…なんか夢中になって…頭真っ白で…。」
急いで離す。

「あ、嫌だったわけじゃなくてっ！もし良かったら…繋いでもらっても…いい？」すみれは、視線を合わせず、おずおずと手を出してくる。

「え？…あ、うん。」てつきり嫌だったのだと思ったので、すみれの意外な反応に驚きを隠せない。

（ちっさくて…やわらかい手だよ…。ってなんでだよ！？さつきからさあ！！）

メモの住所には、空き家が建っていた。2階建ての普通の住宅だ。管理している人に電話をかける。

20分後。管理人らしき、50代くらいの男性が徒歩でやって来た。購入目的ではなく、住んでいた当時のものが何か残ってないか探したいと伝えたら、快く了解してくれた。

定期的に掃除されているらしく、中はとても丁寧に整頓され、キレイだった。残っているタンスや、机についた引き出しを開けてみる。「もう何もなければいいなあ。」協力してくれている管理人が、ぼやく。

駆もそうかもしれないと思った。すみれの方を見る。すみれは、真剣になって、丁寧にひとつひとつの引き出しを取り出して、奥の方までチェックしていた。

（すみれが頑張っているんだから、俺だって頑張らないと！）気合を入れ直し、取り組む。

1時間後。もう他は全部調べてしまって、最後の一部屋となった。すみれは、ここでも黙々と探す。この家に入ってから一度も喋っていない。

（あまり一生懸命になりすぎると、無かった時のショックが大きいくんじやないかな…。）張り詰めた様子のすみれに不安を覚える。

「あつた！」すみれが喜びの声を上げる。

「え！？見せて！見せて！」良かったと安堵する。

すみれが見つけたのは、スミレの花の押し花が栞にされているものだった。

「これ…きつと駆君にもらったスミレだよ！」楽しそうに話すすみれ。

「どうしてわかるの？思い出した？」記憶が戻ったのかもしれないと、矢継ぎ早に質問する。

「これを見たら少しだけ…。この花をくれた人を忘れないようにっ
ていつも持ってたの。」微笑むすみれ。

「そっか…。」なんだか照れ臭かった。

すみれの家の前で、バイクを止め、すみれが降りる。最初は乗った
り降りたりも大変そうだったが、今ではすっかり慣れたらしい。

「今までありがとう。たった数日間だったけど…。いろんなところ行
けて、記憶も少しだけ戻って…。なにより駆君にまた再会できて、す
ごく嬉しかった。」涙ぐみながらささやかな笑みを浮かべるすみれ。
「そんなこれで最後みたいなこと言っつなよ。俺はいつでもすみれの
側にいるし、必要ならいくらでも力になってやる。お前はもうひと
りじゃない。それを忘れんなよ。」何か他にもできることがあるか
もしれないのに、こんなことしか言えない自分が歯痒い。

「…ん。あり…。」また…。駆君ち行ってもいい…。「ぼろぼろ
と綺麗な涙がすみれの目から零れる。

「もちろん！いつでも！」「満面の笑顔で答えると、すみれの顔も
柔らかな笑顔になった。

恋を知ったらキミは俺をどう思うだろう？

果たして俺を受け入れてくれるだろうか。

焦らなくていい。

キミのペースでいい。

キミが恋の花を咲かせるその日まで俺が側で守るから。

「幸せお助けマン改め幸せプレゼンター??」

リリン「リリン」電話が鳴る。

「はいっ！こちらにここに宅急便です！はい、ご自宅までですね。住所は…？はいっ！はい。では、10時ごろお伺いいたします。」電話の応対も大分慣れてきた。

カチャ…と店のドアが開く音がする。

「おはよう、駆くん！今日もよろしくお願いします。」と、言いながらすみれが入ってきた。

すみれは、あれ以来、店を手伝ってくれている。駆が彼女にもやりやすい仕事を考え、それをすみれがやるというのが習慣になっていた。

「あ、おはよう。今日は店番頼むな。もし…電話とか依頼の人が来たら、住所・電話・名前・依頼内容を聞いて、メモしといてくれ。」駆はどんな些細な仕事も、すみれに丁寧に指導した。

「えっと…住所、電話…と名前、依頼内容を聞いてメモするって…。」すみれは所持していたメモ帳に丁寧に記入する。

「わ、時間！…じゃっ行ってくる！なるべく早めに帰ってくるから。」時計を見て、慌ててドアを出ようとすると、

「駆くん。気をつけて…ね？」不安そうな顔で呼び止めるすみれ。心的外傷後ストレス障害…所謂PTSDによって無意識のうちにすみれは事故に過敏になっている。待っていてくれるすみれの為に安全に仕事をこなす責任が駆にはあるのだ。

「おう！行ってくる！」安心させるように笑い、バイクに乗る。

「おばさん、行きましたよ？」店と駆の家を繋ぐドアを軽くノックすると、

「まったく。やっといったか。時間勝負なのにね。で？なんか…言ってた？」渋い顔で駆の母が家の方から出てくる。それを見て、

「『なるべく早く帰ってくる』って……。」「クスクスとおかしそうに笑うすみれ。

「早く帰ってきたことなんかないくせに……。本当に口だけなんだから……。」「ぶつぶつと言いながら、店の掃除を始める母。

「あ、駆くんは優しいから……。困ってる人とか見ると、ほっとけなくて……。だから帰りが遅くなるんだと思います。本人のせいじゃないですよ。」「すみれも慌てて掃除を始め、フォローを入れる。

「まあそれはいいとしても！すみれちゃんひとりに店番させるとか、あり得ないわよ。ただでさえ物騒な世の中なのに……。」「母の言葉は、愚痴というより最後は心配になっていた。

駆は母に店を手伝ってほしいとは決して言わない。今まで苦勞をかけてきた分のんびりと過ごしてほしいと思っっているのだ。

「……ふえつ……。くしょい……。母ちゃんが俺の悪口を言ってやがるな。」「

駆の勘は鋭い。ただし母に関してのみだが。

「こんにちはー！にこにこ宅急便です！」気持ち切り替えて玄関のインターホンを押す。

『はい、緑橋^{みどりばし}です。宅急便屋さん？どうぞ、お入り下さい。』品の良さそうなおばあさんの声がした。

「失礼します！……あ、津和夫木 駆と申します。お世話になります！」「丁寧にお辞儀をする駆。

「あらあら、随分お若い方なのねえ。私は、緑橋 ウメと申します。まあ上がってくださいな。お茶でも出しますから。」「にこにこと朗らかにウメが話す。

居間に通され、すぐ目についたのは、立派な仏壇だった。そこには小さな写真立てが置いてあり、白黒の写真には、まだあどけなさの残る青年が写っていた。

「この写真ボロボロでしょう？でも一枚きりだから、それしか飾るものがなくてねえ。」「駆の視線に気づき、ウメが恥ずかしそうに話す。

「…息子さん…ですか？」なんとなく気になってしまい、無意識に聞く。

「ふふっ…そう思われても仕方ないけど、これはれっきとした私の旦那様よ。」少し胸を張り、

「でも…」と言葉に詰まるウメ。「特攻隊で…死んでしまったの。」

…最期まで戦争なんて間違ってるって言ってたわ。…まあ夫婦と言っても軍が決めた上に、1日限定だったわけだけどね。でもふたりで過ごした時間は穏やかで…幸せだった…。哀しげに、でもどこか誇らしげに、ウメは話す。その顔は、少女の样だった。

「…立派な方だったんですね。」「決められてした結婚でも、確かにふたりは気持ちを通じ合っていたのだろうと思えた。」

「あつ…私ったら、湿っぽい話を話をしてしまつて、ごめんなさいね。話を聞いてくれる人がいなくてね…それに、あなたがあの人と同じくらいに見えたから…つい。」「申し訳なような顔をするウメ。「構いませんよ。…あれ？独り暮らしなんですか？」笑顔で応え、疑問を口にする。

「もちろん！私にとってあの人以上の人はいないわ。」「ウメがとても嬉しそうに笑い、

「…あなたは？」と問う。

「へ？」驚き、声が裏返る。

「あなたにはいないの？大切な人。」「楽しそうなウメ。

「…あー、いるにはいる…けど…じゃない、ですけど…その…なんというか…あんま望みはない…かも…しれませんが、ね…ハハッ…。」「なんだか言っていて虚しい。自嘲的な笑いがこぼれる。

「諦めちゃだめよ？まだ若いんだし…。それにね、その人の近くにいられるってことだけでもすごいことなんだから、自分から逃げちゃだめ！」

「…ぷっ…ウメさん考え方が若い…。」「思わず吹き出す。

（なんだか、恋愛相談に来たみたいだ。）

「恋してるからかしら？」悪戯っぽく笑うウメの顔は年齢を感じさせない。

「実はね…今日あなたに来てもらったのは…。」ふいに真顔にウメ。
「…はい。」つられて真顔になる。

「私が死んだら、骨を旦那の散った真珠湾に撒いてほしいってお願いする為だったの。」ウメの顔からは堅い決意が窺える。

「それ…は…。」言葉を無くす。

「ごめんなさいね、びっくりさせてしまったかしら？…でもね、私もう長くないのよ。」

病院の先生や看護師さんは、なにも言ってくれないけど…自分の身体だもの、解るわ。」キツパリとウメ。

「その…怖くないんですか？自分がいつどうなるかわからないのに…。」
「聞いているこちらが動揺してしまう。急に喉が渴いた。」

「怖くないって言ったら、嘘になるわね。…でも、恐怖よりやっとあの人に逢えるっていう嬉しさの方が大きい。…ふふっ…笑っちゃうでしょう？」少し遠い目をしてウメが言う。

「そんなことないです！」

多くの人は死に絶望を感じてしまうが、もしウメの言う様に先立つた人たちに逢えるとしたら…なんと素晴らしいだろう。そうであればいい、そう信じたいという思いが駆にはあった。

「私には、頼れる親戚もないし…駆くんなら安心して任せられるわ。こんなこと頼んでごめんなさいね…よろしくお願いします。」
深々と頭を下げるウメに何も言うことはできなかった。

「幸せお助けマン改め幸せプレゼンター??」

ウメの家から出た時、辺りはすでに薄暗くなり始めていた。

「ウメさん…あんなに元気そうなのに…。」バイクに乗る元気もなく、押しながら歩く。もう長くないと言ったウメの言葉があまりにも衝撃的だったのだ。

「……。」無言で店のドアを開ける。

「あ！おかえりなさい。」店終いをしていたすみれが、笑顔で近寄ってくる。

「すみれ…ごめん…早く帰ってくるって言ったのに…。」笑おうとしてるのに、うまく笑えない。

「…?」大丈夫だから、私のことは気にしないで？それより、疲れたでしょ？あのね、お母さんと夕食作って待ってたの！」すみれは、駆様子がおかしいことに気づいたが、敢えて触れなかった。

駆は、それから週2回程度の頻度で、ウメの自宅に行く様になった。毎回夕方まで話をする。行けない日は、電話で話をして、さりげなく体調を確認した。

ある日いつものように、ウメの家を訪ねると、インターホンを押しても返事がなく、家の鍵も開いたままになっていた。背筋が凍る思いがして、玄関を勢いよく開き、靴を脱ぎ捨てる。

「ウメさん!?ウメさん!!」呼びかけるが返事がない。

寝室の横を通った時、小さなうめき声の様なものが聞こえた。慌てて寝室に入る。

「…っ…か…ける…くん?」ウメが掠れた小さな声で駆を呼ぶ。

「ウメさん!!大丈夫ですか!?救急車っ…!」一瞬安堵し、まだ安心できないことを悟る。

「大丈夫。…か、風邪…だと思って…たら…こじらせっ…ゴホッコ

ホッ。」「何日か寝たきりだった様で、以前の面影がない。

「しゃべらないで下さい！温かくして…えっと…あと、何か消化の良いもの…おかゆとかっ…作ります。」とにかく元気になってもらいたい、その一心で、混乱する頭で真剣に考えた。

「ふっ…じゃあ…お茶…。」ウメが小さく笑う。

「お茶ですね！すぐ淹れます！」

（何が…幸せお助けマンだ…。全然力になれてないじゃないか。）
こんな自分が情けなくて、不甲斐なくて、胸が締め付けられる。

「ウメさん！どうぞ。」努めて明るく、ウメにお茶を差し出す。

「あ…ごめんなさい。私じゃ…なくてね？」ウメが言いながら、横を向く。そこには、仏壇にあった写真がもってきてあった。夜寝る時は寝室へ持つてくるらしい。

「2、3日動けなくて、お茶も…淹れられなかったから…。」苦しそうにウメが言う。

「そうだったんですか…。でも今はウメさん自身のことも考えてください。旦那さんが心配しますよ？」ウメの想いの強さに心打たれた。

「もうね…充分。私は私の人生を生きたわ。私が生かされた…のは、多分あの人の分も平和な世を見る為…なの。だからもうこれ以上は望ま…ない。」ウメが静かに言う。その表情や口調から迷いは、一切感じられない。

「……。」言葉が出てこない。

「…でも…っ…駆くんに最期に会えたのは、嬉しかった…わ。駆が私に幸せをくれたの…。」ゆっくりと手を布団から出し、側に立つ。駆の手を優しく握り、

「頼んだ…お仕事…よろしく…ね…？」にっこりと微笑むウメ。そして眠るように目を閉じた。

1ヶ月後。散骨というのは、賛否両論あり、取り決めが厳しく、又身内でもないということで、時間がかかってしまった。しかし、や

つとウメとの約束が果たせるのだ。すみれと共に飛行機に乗る。

駆たちが到着した時は、既に夕方だった。大きな夕日が海面を照らしている。

「ウメさん、着きましたよ。」ウメの遺骨に話しかけ、骨壺を開けて、海へ撒く。

「ウメさん…旦那さんに再会できるといいね。」祈る様にすみれが言う。

「うん…。でも、多分逢えるさ！お互い逢いたいだろうしね。」海を見つめ言う。その時、

『そばにいられるだけでもすごいことなんだから、自分から逃げてちゃダメ！』というウメの言葉が頭に響いた。

「なあ…すみれ。」隣にいるすみれを見る。

「ん？なあに？」駆の方を向くすみれ。

「一緒に暮らさないか？」まずは自分から一步步み寄るところから始めたいと思った。

「…っ…はい！」頬を少し赤らめ、満面の笑みで、すみれが返事をした。

『幸せと笑顔を届けます。』

あなたの幸せ助けマン』

にここにこ宅急便

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0526h/>

『にこにこ宅急便』

2010年10月8日15時29分発行